

戦後強制抑留の労苦 極寒のシベリア抑留

終戦から68年。今なお、戦争による被害と聞いている方々がいます。私たちは両親や祖父母が経験した悲惨な過去を繰り返してはなりません。
終戦時、約60万人がソ連軍に連行され、過酷な労働を課せられたシベリア抑留についてお伝えします。
※史実をお伝えするため不快な表現が含まれています。



上) 収容所内。貴重な食料を分け合っている様子を再現。生死を分ける食料の分配には仲間の目が光る。
下) 収容所のジオラマ。収容所の外部には鉄条網が張りめぐらされていた。所々に連発銃を肩から下げたソ連軍の兵隊が監視していた。



ソ連軍の侵攻
昭和20年8月9日、ソビエト連邦と満州国の国境では、ソ連軍が侵入し、関東軍は後退した。終戦後、武装解除し、投降した日本軍捕虜とソ連軍が逮捕した日本人のシベリア抑留は約60万人。厳寒の環境下で過酷な労働を強いられ、十分な食事・休養も与えられず、約5万5千人が死亡したといわれている。抑留は主に4年で、最長で11年に及んだ。

満州国
ロシアの侵攻を受けた満州は、おおよそ中華人民共和国の北東部を指す。日本は、日露戦争の勝利から満州に権益を持ち、関東軍を置いた。昭和7年に満州国が建国されたが、裏で日本が操る国家だった。日本の国策で満州への日本人の移住が進められ、昭和15年の国勢調査では約80万人の日本人が住んでいた。

丸裸の遺体
捕虜病院で墓堀りに従事していた捕虜者の証言では「わずか3カ月間で飢餓や伝染病で約千人が亡くなった。初めは1人ずつの墓を掘ったが、死亡者が増えるにつれて、2人用、5人用、さらには25人用の墓を掘った。それでも墓が足りなくなり、遺体を重ねて埋葬した」という。抑留者の遺体の衣類を全てはぎ取って、谷底に落としたという話もある。

上陸後の悲劇
シベリア抑留者は、主に舞鶴港へ上陸した。「シベリア帰りは共産主義者だ」という噂が流れており、親兄弟の中にも戸惑うものがいた。実際に収容所では一時間以上の思想教育が毎晩あった。

ソ連の国情
第二次世界大戦で、ソ連が失った若者は2千万人以上。昭和20年春、東満州の要塞から見るソ連側の要塞で、砲撃の演習をしていた中には女兵がいたことが知られている。独ソ戦の最盛期には、戦力をヨーロッパに集中していたようで、属国モンゴルからも2万人が欧州戦線に参加した。

日ソ中立条約
「ソ連は卑劣な国だ。中立条約の有効期間内に進攻した」という声がある。しかし、大正7年8月、日本はロシア革命の混乱に乗じ、邦人保護を理由に派兵。バイカル湖の付近まで侵攻していた。昭和16年4月、日ソ中立条約が締結されたが、欧州での独ソ戦でレニングラード攻防に、ソ連が苦境であった昭和16年夏、満州に約70万の軍隊を終結させて、極東ソ連軍をけん制した。ソ連側から見れば「お互いさまだ」ということになる。



▲舞鶴港で出迎え者と喜びの手を振りかわす復員軍人。シベリア抑留者の多くが舞鶴に引き揚げた。



▲作業で使われたロシア製のノコギリとオノ



▲収容所での食事。左から朝食の薄いスープと高粱のおにぎり・昼食の黒パン・夕食の薄いスープと雑穀。ノルマに達しないとさらに量を減らされた。

地図) 青線はシベリア鉄道。赤線はバイカルアムール鉄道(第2シベリア鉄道)。赤の部分の満州の領土。当時の大日本帝国、中華民国、ソビエト連邦、モンゴル人民共和国、蒙古連合自治政府と国境を接していた。